

なぜ時間と変化は不可分なのか

——フッサール初期時間論における「絶対的意識流」の比喩——

京念屋 隆史

時間と変化の間には、一方を前提とすることなく他方を理解しえないという相互依存性がある。本稿は一貫してこの視座のもとで E・フッサールの初期時間論『内的時間意識の現象学講義』(Hua X, 以下『講義』と略記)を解釈する。フッサールの洞察は、変化的でも不変化的でもありうる出来事の内に変化しないことがありえない「流れ」を見出し、それを時間系列からいったん分離したことにある。この流れは(対象面ではなく作用面に着目して)「意識流」と呼ばれ、「時間図表」の縦軸として、通常的时间直線の横軸に直交するように表現される。

しかし、この洞察は『講義』第 3 章「時間の構成と時間客観の構成」においてあらかじめ裏切られている。彼は複数の意識流を横方向に貫いて、例えば前の知覚内の把持が後の知覚内の把持の把持になる(沈下する)という連続性を可能にする、唯一の「絶対的意識流」を考える。この議論の破綻は、知覚に内在する動性を看過し、それ自体変化する知覚から別の知覚への変化、という高次の変化の知覚へと暗黙のうちに訴える点にある。この議論の拒否によってのみ冒頭の洞察は生き残り、現下の知覚位相(縦軸)だけが意識流として残されることになる。

以上の予備考察ののち、本稿は時間と変化の相互依存性の解明に取り組む。一方で、時間の理解は変化の理解に依存する。すなわち、出来事の時系列はかならず動的に、「現在の出来事が過去になる」といった仕方では理解されねばならないが、この動性の理解は出来事内の変化の理解に依存する。本稿はこちらの依存関係を、フッサールの「根源的代表象」としての意識流という観点から示す。時間の動性として理解されているものは、そのつどの出来事過程(Vorgang)の進行という動性に由来する。これが本稿の一方の主張である。

他方で、変化の理解は時間の理解に依存する。このことはあらかじめ継起的に記述された変化（過去においてさなぎ→現在において蝶）については自明である。しかし本稿が注目するのは、ひとつながりの知覚や言語的理解に収まる変化であっても、それが例えば現在においてある、という一時点への相対化こそが変化を変化たらしめていることである。この限界づけなしには、流れはもはや流れとは呼べない何かにとどまる。このことを、時間系列が（還元ではなく）排去された「無限的」主観性の眺めとの対比のもとで、「我々」有限的主観性の時間理解を特徴づけることで示す。

1. 出来事とその流れ

1-1 把持—原印象—予持

まず、フッサール時間論の中核をなす把持・原印象・予持という概念群をおさえるため、差し当たり次のように解してみよう。例えば現在流れているメロディの知覚において、1つ目の音・2つ目の音が聴こえ、そして3つ目の音が聴こえているとき、過ぎ去った今

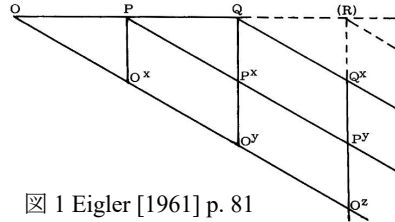


図 1 Eigler [1961] p. 81

さっきの音たちは意識のうちに独特の仕方で引き留められており、これが「把持 (Retention)」と呼ばれる。これと反対に、未だ聴こえていない4つめ、5つ目の音を待ち構える働きが「予持 (Protention)」である。このように把持・予持された音たちが、実際に聴こえている3つ目の音、すなわち「原印象 (Urimpression)」と結びついて、一定の幅をもつメロディの現在知覚となる¹。これを表現した「時間図表」は、図の横軸の点たち (O, P, Q) を一音一音演奏されていく個々の音として、それらが総合されて成り立つメロディの知覚を図の縦軸 (Q~P^x~Q^y) として読むことができる。

とはいえ、このように解された把持・原印象・予持²は、次のような批判を免れないだろう。

このすべては、まずわれわれが日常的にすでに知っている現在・過去・未来という区別を微小現在へと投入したうえで、次にそこから「根源的現在・根源的過去・根源的未来」を導いているだけなのではないだろうか？（中島 [2016] p. 128）

つまり、上の説明は「メロディが聴こえている現在の中での、より小さい過去が把持されている」と実質的には同じことしか言っておらず、現在と原印象の区別もまた、現在と（その現在のうちに読み込まれた）狭い現在とを対比させていただけなのである。この難点を解消すべく、把持—原印象—予持と時間系列（過去・現在・未来）との区別を徹底することが本節の課題である。

1-2 作用以前の作用

この区別の最も一般的な特徴づけは、想起や知覚が過去や現在に向かう一つの作用であるのに対して、把持や原印象はそれらの「『作用』以前の作用」（滝浦 [1976] p. 172）群であるというものだ。つまり、それら作用群こそが通常の志向的作用を構成するので、把持・原印象はそれ単体で対象（や出来事）へと向かう作用であることはできない（cf. 斎藤 [1987] p. 194）。把持・原印象はそもそも別々の個体化された作用ではなく、それらが相互融合して一つの作用を形づくる。

すなわち現出、例えば家の現出は、ひとつの時間的な存在であり、持続する存在であったり、変化する存在であったり、等々である。〔現出者の〕現出ではない内在的な音も同様である。しかしこの家—現出は知覚的〔＝原印象的〕意識および把持的意識ではない。これら〔原印象・把持〕は時間構成するものとしてのみ、流れの契機 [Moment des Flusses] としてのみ、理解されうる。（Hua X: 75/305f., §37）

それゆえ、これら作用群の現象に忠実な（後述する「知的な分析プロセス」によらない）理解は、その「流れ」が把持から—原印象をあくまで通過区間として—予持の方向へと体験される、という捉え方であろう。言い換えれば、そ

れぞれの作用やその対象を実体化せずに、その間の連続的推移こそを意識の所与と見なすという捉え方である。把持・原印象（・予持）の連続性は「疑似時間系列 (quasi-zeitliche Ordnung)」と呼ばれその客観的時間における系列性が拒否されるが (cf. Hua X: 82/317, §39), 実際の現象においてはそもそも系列性すら消え去る。

だとすれば冒頭のように、メロディの内部にさらに個別の音という微小対象を読み込むことは本来であれば許されないが、その制約は厳しすぎるため、もう少し緩めた制約を次節冒頭で述べる。しかし、少なくとも「3つ目の音」を原印象にとること（現在知覚の内に現在に似た特異点を導入すること）は許されない。というのも、「ここで言われたことは個々の音にも移される」（Hua X: 23/109, §7）のであり、メロディ内の個別の音を対象化すればそれぞれを構成する把持から予持が必要になり、それらを音の立ち上がりや減衰として対象化すれば再び同じ背進が起こるからだ³。

1-3 時間の還元・流れの抽出——時間図表の二軸

『講義』のフッサールはもっぱら変化する対象のもつ動きの知覚を考察しているように見えるが、分析の主眼は実はそこにはない。これは、把持から予持が契機（非独立的部分）となって構成される作用の「流れ」とは何か、という問題にかかわる。先ほどの引用の「家の現出」を例にとるなら、作用が向かう先である（超越的）対象、つまり家ではなく、その家の（内在的）知覚現出という過程が分析の主題である。しかし、その現出内容の動きが流れなのではない。現出内容は静止的であることもありうるし (cf. Hua X: 74/303, §35), その場合にも「流れ」は流れるからである。すなわち、現出内容が変化する場合（同じ家を周りを歩きながら見る）だけでなく、静止している場合（正面からじっと眺める）ですら、流れは恒常的に流れる。

このように根本的に解された流れ、意識流こそがあらゆる超越的出来事ないし対象の構成の起点にある、というのがフッサールの洞察の一つである。すなわち、そうした作用の流れが所与として与えられ、それが変化する／変化しない出来事として統握され（この段階でメロディや家の現出が構成され）、場合によってはその現出において同一である対象もまた統握される（この段階で家

という対象が構成される) , というのが構成の順序なのである。

ところで, あらゆる現出内容が静止しても流れるものは何か, と問われれば, すぐに思いつく答えは「時間が流れる」というものだろう。たとえ世界が全て静止しても, それと無関係に時間は流れる, というように。しかし, そのように大げさでないより安手の——そしてもしかするとこちらが「根源的」かもしれないような——別解がある。フッサールは「どんな出来事 [Vorgang] においてもみな『何ものか』が進行する」(Hua X: 74/303f., §35) と述べている。この「何ものか」を「もの」(対象)ではなくその当の出来事のことであると解することで, この別解を与えることができる。つまり, 不変的出来事であっても, その出来事が進行するという仕方では必ず流れがある, という見方である。この観点の下でこそ, フッサールが客観的時間の還元と呼ぶ操作もまた理解可能なものになる。

この流れは時計やクロノスコープで規定される客観的時間の流れではないし, 地球や太陽との関係において確定される世界時間の流れでもない。というのもそれらの流れは現象学的還元で服するからだ。(Hua X: 124/568f., Beil. XI)

この還元は, 客観的時間から「現象学的時間」なる別の時間を, 実在の対象の属する時間からそれらの現出の属する時間を取り出すことではない(cf. 斎藤 [1987] p. 191)。というのも, 客観的時間ないし世界時間とは, 超越的な出来事もその内在的な現出も同じように属するところの, ただ一つの時間的順序系列 (Zeitfolge) だからである。その客観的時間を還元して得られるのは把持から予持への「流れ」であり, その作用において見られている出来事の進行の動きそのものなのである。

さて、図1の時間図表を俯瞰的に見た図2によって、時間系列からの流れの分離を確かめよう。意識流はそれぞれの縦矢印(↑)であり、下(把持)方向から上(予持)方向へと体験される。これは図1では把持・原印象などと分割され区切られていたが、本来であれば滑らかな縦矢印で書き表されるべきものである。ま

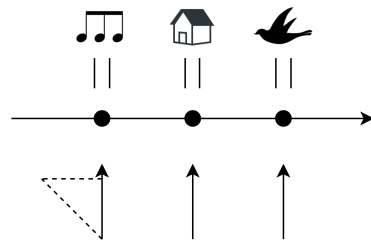


図2

た、意識流はそれ全体として一個の作用であり出来事であるため、それが横軸に並列され(↑↑↑)、それに対応する出来事系列(・・・)とともに時間系列をなしている。重要なのは、横軸(時間系列)と縦軸(流れ)が直交していること、また、流れが横軸方向ではなく縦軸方向に、すなわち出来事通覽的ではなく出来事内在的に捉えられている点である。

2. 流れることとその知覚

2-1 作用内在性の制約

前節冒頭のメロディの例による説明は、現象の本来の連続性に逆らって、把持や原印象に個別の音を割り当てていた。しかしこの説明は必ずしも不適當であるわけではない。

もちろん、さきほど試みられた詳述を可能にするのは知的な分析プロセスである。〔それによって〕最初の所与性であるところの、音cの切れ目なき統一体は、部分に分割可能な統一性であることが明らかになる〔…〕。それは例えば〔メロディなどの〕同時的な継起を補助手段とすることによってであり、それによって、平行して経過する〔作用の〕持続の中で諸部分が区別されるようになる〔…〕。(Hua X: 86/325, §41)

つまり、流れを個別の音やそれに対応する把持から予持へと分割する語り方は、「知的な分析プロセス」においてのみ可能であり、あくまで現象において

は連続的な流れが所与であることに自覚的であればよい。言い換えれば、意識流（↑）の内側に反省によって読み込まれた系列はあくまで、一つの作用に内在する流れの方向づけを説明するための疑似時間系列としてのみ正当に用いられうる、という制約を守ればよい。

しかしフッサールは、とりわけ『講義』第3章において上の制約に明白に抵触している。このことを本節は示すことになる。とはいえこの失敗は、フッサールがそこで突き当たった難問と切り離すことはできない。

2-2 二種類の同じ流れ——流れの自己現出

意識流は、時間的出来事やその現出がその流れの内で構成されるという点で、それらに先立つものだった。にもかかわらず、意識流は全体として一つの志向的作用であり一つの現実存在であるから、メロディだけでなくメロディの知覚も同じく時間的位置をもつ出来事であるにすぎない。このことは、時間構成するものとしての意識の分析という『講義』の方針にとって一つの困難となる。それゆえフッサールは、すでに時間位置を付与された意識流を構成の起点とすることを拒み、ついには意識流をも構成されたものと見なさざるを得なくなる。それによって「メロディは意識流の内で現出するが、今度はその意識流は何によって構成されるのか」という問題が生じ、これに同じく「意識流によって」と答えることになる。

内在的な、時間構成する意識の流れは […] 以下のようなとても奇妙だが理解可能な仕方存在する。すなわち、その流れのうちで流れの自己現出が必然的に成り立ち、またそれゆえ、流れ [Fluß] それ自体が流れること [Fließen] のうちで把握可能でなければならない。 […] 構成するものと構成されるものが一致する。とはいえもちろん、両者があらゆる観点で一致するわけではない。 (Hua X: 83/320, §39)

流れを構成する流れは、それをさらに構成する意識流がその背後にもはやないという意味で「絶対的意識流」とも呼ばれるが、この引用で「流れること」と呼ばれているのは興味深い。流れすなわち作用も「流れる」（それと相関的

に作用の対象もまた流れる)のであってみれば、(先ほど「流れ」が客観的時間の流れではないと規定されたのに対して)この「流れること」はまさに時間の流れそのものであり、諸体験を含む出来事一般が未来から現在へ到来し、現在から過去へと過ぎ去ることを指していると言える。時間図表で言えば、出来事系列に沿った横矢印(→)が「流れること」にあたり、縦軸方向の「流れ」たちの時間系列(↑↑↑)もまたその唯一の流れること(→)に貫かれている⁴。しかし、この流れること→はもはや知覚することができない(知覚できたとすればそれは流れ↑にすぎない)のだとすれば、いかにして→が↑として自己現出する(↑が→の現象形態である)という関係が成り立つのだろうか。

フッサールはここで把持概念も二重化し、図表の斜下方向(↘)に走る線にすることによって、直交する二つの流れを斜めに媒介しようとする。「縦の志向性」と呼ばれるこの拡張された把持は、メロディを個別の音に分割する類の説明(本節冒頭で制約を課した説明)なくしては理解できない。例えば、メロディの3つ目の音を聞いているとき1つ目の音が把持されている——これは「横の志向性」と呼ばれる通常の把持である。ところで、この3つ目の音における1つ目の音の把持は、2つ目の音のときの知覚に含まれていた1つ目の音の把持をさらに把持したものである(=把持の把持)。これがここで新たに導入された縦の志向性である⁵。それによって、1つ目の音はその同一性を保ったまま「原印象、把持、把持の把持…」と時間図表の右下方向へ沈下(sinken)していく。この沈下の知覚が、「意識の恒常的な流れ去りの内で、私は過ぎ去った意識が把持されている系列を[…]この系列の恒常的な後ずさり[Zurückschiebung]とともに把捉する」(Hua X: 82/318, §39)ことだとされる。

2-3 変化の変化の知覚

「縦の志向性」の議論の生命線は、流れることは見ることができないが、それが流れを沈下させているところなら見える、という点にある。しかし、この議論はいくつかの破綻を含む。

まず、ある位相が把持である作用と、把持の把持である作用とは別の作用であり、複数の作用をその個別性を保ったまま通覧することはできない。時間図表という形で複数の流れを上空から見ていると容易に見落とされることだが、

実際の現象において与えられているのは現下の(aktuell)意識流ただ一つである。しかし、ここではそうした複数の作用の通覧が可能であると仮定して、それでも議論が失敗することを示そう⁶。

メロディが流れるとは、例えば一つ目の音が原印象から把持へ、把持の把持へと沈下していくのを見ることだ——このように語ることは、本節冒頭で課した制約(把持・原印象・予持を一つの作用に内在する流れの方向づけとしてのみ記述すること)に抵触する。つまり、本来であれば現象においては存在しない(相互融合して消え去る)はずの疑似系列は、ここでは、ある作用内の位相と別の作用内の位相との貫作用的な同一性について語ってしまう真正の系列へと成り下がっている。

この疑似性の無視によって、把持・原印象・予持が本来それを説明するべきだったところの、諸出来事に内在する流れの動性もまた失われている。それは次のような例で顕著である。

一羽の鳥がたった今、日当たりのよい庭を飛んでいく。私がまさに一瞥するその位相の内に、私は過ぎ去った時間位置の諸射映の把持的意識を見出し、またそれはどの新たな今においても同様である。[...] その鳥はそれの場所を変え、飛んでいく。どの新たな位置においても、その鳥には(すなわちその鳥の現出には)以前の諸現出の諸残響が付着している。(Hua X: 111/483, Beil. VI)

ここで把持・原印象(・予持)からなる射映連続性(↑)はその動性を剥奪されており、動きの一コマを捉えた一枚の写真のように、把持や予持は単なる被写体のブレのようなものに成り下がっている。このように射映連続性を動かないものと見なしたからこそ、先ほどの「沈下」の議論では、射映連続性それ自体がさらに射映する(↑↑↑…)かのように(パラパラ漫画へと取り集めてようやく動き出すかのように)説明されていたのである。しかし、流れの知覚は、把持・原印象・予持からなる一本の射映連続体だけで説明されねばならない。写真の比喩を正しく用いるなら、それは青山 [2017a] が述べているような、シャッターを切る前後の動きを一枚の写真へと内在させた「動く写真」でな

ればならない。それゆえ沈下とは、それ自体変化を含んだ意識流から同じく変化する別の意識流への、知覚不可能な高次の変化であらざるを得ないのである。

このことは逆から述べた方が分かりやすいかもしれない。もしあなたが現下の作用から別の作用への連続的な変化を見ていると思ったなら、その知覚された変化は把持から予持へと繋ぎとめられていることになり、作用超越的に思われたその変化は結局のところ一つの作用の内側に含まれていることになる。これは視点を変えれば、もともとその一つの流れが与えられており、後からそれを複数の作用へと分割した（つまり冒頭の「知的な分析プロセス」をほどこした）にすぎないと言える。

それゆえ、沈下の知覚は不可能であり、知覚可能な流れは諸作用内の流れに限定される。つまり、我々は時間の流れを見ることはできない。より適切に言えば、見られたもののうちにマイクロな到来と過ぎ去りを読み込む（後述するように、代表象させる）ことができるだけで、その当の眺めが到来し過ぎ去ることを見ることはできない。

3. 時間の流れはいかにして代表象されるのか

3-1 根源的代表象としての流れ

前節でみた「流れの自己現出」の議論の破綻によって、第1節でみた時間系列と流れの区別は維持される。そして、時間系列を貫く唯一の流れることは、その直接的な知覚だけでなく（沈下を見ることによる）間接的な知覚もまた不可能であることになる。ところでフッサールはこうも述べていた。

むしろ我々はこの流れ[↑]を前経験的時間あるいは現象学的時間と呼ぶ。この時間は、客観的時間的な諸述語の代表象の根源的代表象〔die ursprünglichen Repräsentanten〕を提供しており、また類比的に言えば時間感覚を提供している。（Hua X: 124/568f., Beil. XI）

ここに「流れること」を、知覚されるのではなく流れによって代表象されるものとして捉える道が残されている。しかし、なぜ「流れること」は「流れ」

という代表象に依存するのか。そして、なぜその代表象こそが「根源的」であるのか。

3-2 出来事過程と時制的変化

唯一の流れは、個々の出来事（作用はその一例である）を、それ全体として未来から現在に到来させ、現在から過去へと過ぎ去らせるものである。前節で見たのはこれを知覚することの不可能性だったが、知覚ではない他の認識手段、例えば言語的理解に訴えたところで事情は変わらない。青山 [2004] はある出来事が「現在から過去になる」といった変化を「時制的変化」と呼び、時制的変化の理解は、「さなぎが蝶になる」といった性質的変化のアナロジーに依存すると論じる。

一般に「『アン女王の死』が過去になる」といった文が自然であるように思われるのは、われわれが何らかの性質的変化を同時に理解しているためである。現在としての女王の死と過去としての女王の死はまったく同じ時点に位置するため、時間系列を眺望した地点から「さなぎが蝶になる」と述べるように、「現在としてのアン女王の死が過去としてのそれになる」と述べることはできない。（青山 [2004] p. 231）

時制的変化を表す文に登場する「現在」や「過去」は端的な時制表現ではない。「ある出来事が現在から過去になる」という変化が全体として過去・現在・未来のいつ起きているかが言われていないという点で、これは実のところ性質的変化の一種なのである。そして、もしその「現在」や「過去」を端的な時制表現と見なそうとすれば、その間の「なる」という（不可能な）高次の時制へと訴えることになる。

ところで、本稿にとって重要なのは、この比喩的理解の元手となるべき変化の本性である。青山 [2004] は性質的変化について、二時点以上において異なる性質をもちつつ同一である対象 X を担い手としているが、この規定は狭すぎるのではないか。確かに「『Xはさなぎだ』が過去になる」を理解するには「Xが蝶になる」を理解するだけで十分であるが、「アン女王の死」など出来事一般

について、その過ぎ去りにおいて背後で理解されているのは何だろうか。

それは一般に言って出来事が始まって終わるという変化であり、より適切に言えば、その出来事が進行するという変化ではないか。出来事は一つの時点に位置付けられているだけですでに始点と終点という二時点を内に含んでいるとも言えるが、より適切に言えば、どんな出来事 (Vorgang) もその過程として変化を含むからである⁷。この観点からは、「さなぎが蝶になる」もまた「羽化」という一つの出来事の進行であり、その変化を (対象-性質関係によって) 記述のうえで際立たせたものだと言える。

かくして、時間の流れの比喩的代表象の本質として、一つの出来事に内在する流れ (変化) であること、が抽出できる。それは「家が見えている」といった不変的な出来事でもよいし、「さなぎが蝶になる」のような一つの知覚作用に収まらない変化でもありうる。

3-3 無時間的な眺め

我々は出来事内の流れにおいてのみ時間の流れることを理解し、またその一例としてそれを知覚する。だとすれば、個々の出来事を超えた唯一の流れとは、いったん流れを個々の出来事の内ですべて捉えておいた上でその限界づけを取り去って (言わば登った梯子を蹴飛ばして) その動性だけを取り出したものではないだろうか。だからこそ個々の流れこそが、自らが代理するものを自ら構成する「根源的」代表象なのである。

[...] この流れ [→] は、我々が構成されたものに倣って [nach dem Konstituierten] 流れと呼んでいる何かであり、しかしそれは時間的に「客観的なもの」ではない。この流れは絶対的主観性であり、またそれは比喩的に [im Bilde] 「流れ」と言い表されうるもの、現実性の点・源泉点・「今」において発源してくるものといった絶対的諸特性をもつ。(Hua X: 75/305, §36)

唯一の流れることは、個々の意識流 (フッサールがなおも「構成されたもの」だと見なそうとするもの) からの比喩によってしか流れとして構成されえない。

このことは二つの側面をもつ。一方で、流れることは、我々のもつ比喩的理解を離れてそれ自体としてあるものとしては、それはそもそも流れと呼べない何かにとどまる。にもかかわらず他方で、そのようなものを我々は流れとして表象してしまっている。この二側面についてこの順に論じる。

まず、この代表象の順序を逆転させて、もし「流れること」が所与として与えられるなら、それは絶対的主観性（これは超越論的主観性と同義である）というよりむしろ「無限的」主観性とも言うべきものだろう。想像変更ではなくある種の思考実験によって⁸、そのような主観と「我々」有限的主観性との違いを考えてみよう⁹。無限的主観性は、過去から未来までの出来事系列を一挙に知覚する能力を持つ、と述べるだけではまだ「我々」とは区別できない。なぜなら我々もまた——一定の範囲内で——音の出来事系列を一挙に（auf einmal）捉えて、それら系列を融合させる形でメロディという統一体を表象するからである。それゆえ無限的主観性と我々との差異は、その知覚それ自体が一つの出来事として限界づけられているかどうか、という点にのみ求められる。無限的主観性とはすなわち、限界のない把持と予持の能力によって全てが相互融合して、（もはや数えられる意味での一ではないような）一つの意識流へと回収されてしまい、かつその意識流それ自体もまた出来事であることができない主観性のことだろう。その無時間的な眺めは永遠に流れずに立ち止まる¹⁰。

3-4 世界大の出来事とその限界

個々の流れから限界づけを取り去ってその動性だけを取り出すことはつねに失敗する。しかし、これは逆から言えば、もし動性だけを比喩によって取り出せるとすれば、その限界づけもまた比喩によってつきまとう、ということではないか。おそらくそれが、我々が理解する時間の流れの場合である。

問題は、流れを限界づけるものとは何か、ということだ。それは始点と終点による境界づけであり、流れを二時点に挟まれた区間のうちで捉えることだ、というのはおそらく派生的な理解である。我々が個別の出来事をそれぞれの意味ごとに一個の統一体として捉えるのであり、それと別の出来事との境界点との挟みうちによって捉えるのではない。ましてや、世界時間の流れの始端や終端は、そこを現在が通過するものだけを時点と呼ぶなら、始点や終点などではな

いだろう。それは言わば決して現前したことのない過去、ないし決して現前しない未来であり、ただ流れの方向付けを示す疑似時点としてのみ存在しうる。

無限の主観性の眺めに欠けていたのは、その眺めと並び立つ他の出来事の存在ではない。その外部の存在しなさについては我々の時間の流れについても事情は同じだからである。だとすれば、「我々」が代表象によって持つ理解とは、その時間の流れを内在させる世界大の出来事という理解ではないだろうか。つまり時間の流れとは、世界全体を一つの出来事のように、この現実を限界づけられた全体として捉えたときの、その出来事の進行のことではないだろうか¹¹。

とはいえ世界出来事の限界づけもまた、そのつど知覚され理解された個々の出来事に由来する。それゆえむしろ、個別性を取り去さられた動性こそが、翻って世界を一個の全体として捉えさせる当のものなのである。

註

1. 以上の説明は『講義』第14節のメロディの想起（ここでは簡単のため知覚とした）の事例分析に基づく。
2. 以降、予持についての記述は適宜省略する。
3. こうした背進の議論を、原印象に割り当てる幅が次第に小さくなって、ついには幅を持たない「限界点 (Randpunkt)」に至る、と解するのは誤りだと考える。原印象の位置が例えば3つ目の音の内側のどこにあるかだけが特定できないのではなく、そもそも作用の内側に原印象の「位置」を特定すること自体が（背進が起こるということは）初手でつまづいているのである。だとすれば、原印象の前後で把持と予持を分けることもまた本来であれば不可能であり、少なくとも「4つ目の音はさつきは予持だったがいまは把持である」などと語ることはできない。どちらの音がより把持側に近いのか、などと語ることはでき、それに伴い、把持や予持もまた出来事の開始位相と終了位相の非主観的意識ということになるだろう。
4. フッサールは「流れ (Fluß)」という語でどちらの流れも指すため、本稿では「→」で流れること（時間の流れ）を、「↑」で流れ（作用、諸意識流の一つ、把持から予持への射映連続性）を表し分ける記法を用いる。
5. 縦の志向性は実のところ、把持の把持のような分かりやすい場合だけでなく、把持とは原印象が把持になったものだ（これは把持の明証性と呼ばれる、『講義』第13節参照）という理解にまで暗黙のうちに前提とされており、本稿第1節冒頭の例示もまたそうなっている。「音を把持している」を「音の原印象を把持している」と言い換えることの見かけ上の自然さは、横の志向性への縦の志向性の混入を容易にしよう。
6. 青山 [2017b] は、時間図表の横軸方向への通覧を許さないケースを「フッサール

説」、許すケースを「バーバーボール説」と呼び、より制約の緩い後者ですらも時間の流れの知覚ではありえないことを示している。

7. 出来事 (Vorgang) とは進行する (vorgehen) ものであり、出来事 (event) はつねに過程 (process) としても捉えうる。その端点を「知的な分析プロセス」によって event として捉え直したものが始点と終点だろう。『講義』の谷徹訳では、Vorgang“は「出来事過程」と訳出されている。
8. ここでの想像と思考との区別については植村 [2018] を参照。フッサールの「世界無化」と同様、時間 (時制ないし出来事系列) が失われた経験とはどんなものかを想像することはできない。しかし、世界や時間なき意識という観念は、「世界」や「時間」が超越論的な概念である限りむしろ思考されるのでなければならぬ。この点については本稿註 9 を参照。
9. ここでの「我々」とその外部の関係については、カントを論じた川谷 [1999] が示唆に富む。「我々」有限的存在者の直観の時間空間性が「超越論的」であるとは、それこそが経験を根源的に可能にする (ゆえに想像変更ができない) にもかかわらず、他方でそれは「我々」の形式にすぎない (ゆえに思考による無化を許す事実性をもつ) ということである。川谷はこの時間空間性が度外視された位相 (物自体) を無限的存在者 (神) へと直結させることを拒み、「我々」とは別の枠組みをもつ有限的存在者を「我々」の他者として対置する。これと同様、本稿が「我々」と対比させた「無限的」主観性もまた、その一挙の眺めに限界がないこと (無限界的であること) としてしか規定されていない。すなわち、神のような無限の力能ゆえに外部が無いのか、それとも (しばしば「我々」が動物をそう見なすように) その外部をただ知らないだけなのかは実は決定されえない。
10. そのような時間は伝統的に直線ではなく円環として表象されてきた。それは過去と未来の次元が融合して無区別になり、始まったことも終わらうることもなく運動し続ける動性そのものの形象である。この点についてはデリダ「ウーシアとグランマー」(Derrida [1972]) を参照。
11. 『存在と時間』のハイデガーは、時間がいかに客観的なものとして (今の継起や出来事系列として) 理解されようとも、その頹落した見方においてすら今や出来事が到来し過ぎ去ることが理解されてしまっていることのうちに、「[...] 現存在の時間性の有限的到來性の公共的反映がひそんでいる」(SZ: 425, §81) という。時間の動性が現存在の動性によるものでなければならぬのは、動性の理解には有限性の理解が、現存在の全体性を未完了のまま限界づける「死 (Tod)」の理解が不可分だからだ。現存在は、人生の終端にある出来事としての落命 (Ableben) を待たずして、つねに死んでいる (sterben)、死に至っている存在 (Sein zum Tode) である。死とは、生をそのつど内側から限界づけ運動たらしめるテロスであって (cf. 荒畑 [2018] p. 292)、そのようなテロスを取り去られた無限界的な生は、全き現前性であるがゆえに絶対的に死んでいる (運動していない)。それゆえ他方で現存在は、全き臨在 (パルーシア) としてでなくそのつど (jeweilig) 存在するものとして、ある意味で時間系列化されて内時間的に存在するものでもなければならぬ。

参考文献

引用文中の強調は全て原文に属する。[] の省略および付記は引用者による。

訳は拙訳を用い、参考にした邦訳の頁番号を（原書頁／邦訳頁）の順に記す。

略号

Hua X: Husserl, E. [1928] *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, *Husserliana*, Bd. X, hrsg. von R. Boehm, Den Haag: Nijhoff 1966（谷徹訳『内的時間意識の現象学』ちくま学芸文庫, 2016）。

SZ: Heidegger, M. [1927] *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 1967（原佑・渡邊二郎訳『存在と時間』中公クラシックス, 2016）。

Derrida, J. [1972] “Ousia et grammè: Note sur un note de Sein und Zeit”, *Marges: de la philosophie*, Paris, Les Éditions de Minuit, pp. 31–78.（高橋允昭・藤本一勇訳「ウーシアとグランメー」『哲学の余白 上』法政大学出版局, 2007, pp. 77–136.）

Eigler, G. [1961] *Metaphysische Voraussetzungen in Husserls Zeitanalysen*, Meisenheim am Glan: Hain.

青山拓央 [2004] 「時制的変化は定義可能か：マクタガートの洞察と失敗」『時間と自由意志：自由は存在するか』筑摩書房, 2016, pp. 217–236.

青山拓央 [2017a] 「心と時間：その哲学と科学（第2回）バーバーポール説」『本』42(7): 講談社, pp. 38–41.

青山拓央 [2017b] 「心と時間：その哲学と科学（第3回）過去の影，未来の影」『本』42(8): 講談社, pp. 38–41.

荒畑靖宏 [2018] 「存在とアスペクト：時間形式をめぐるハイデガー・トンブソン・レードル」『現代思想』46(3), 青土社, pp. 283–294.

植村玄輝 [2018] 「世界無化の考察によってフッサールは何をどこまで示したのか」『フッサール研究』15, フッサール研究会, pp. 1–23.

川谷茂樹 [1999] 「「われわれ」の有限性：『純粹理性批判』「感性論」に定位して」『哲学論文集』35, 九州大学哲学会, pp. 39–55.

斎藤慶典 [1987] 「フッサール初期時間論における「絶対的意識流」をめぐる」『哲学』37, 日本哲学会, pp. 186–198.

滝浦静雄 [1976] 『時間：その哲学的考察』岩波新書。

中島義道 [2016] 『不在の哲学』 ちくま学芸文庫.